

古典を読む Reading Classics

得丸久文[†]・田崎 徳友[‡]

Kumon Tokumaru, Noritomo Tasaki

独立研究者[†] 九州女子大学[‡]

Independent Researcher, Kyushu Women's University

tokumaru@pp.ij4u.or.jp, noritasa@fka.att.ne.jp

概要

人類共有知ゲノムとは古典である。日本・東洋・西洋にかかわらず著作権の切れている古典は、ウェブ上でほとんどのものを無料でダウンロードできる。ところが人々の読書離れのなかで、古典は前よりも読まれなくなっている。教育政策、商業主義、伝統喪失、スマホ文化など、多忙な現代人を取り巻く文化的環境を概観し、古典と現代人のインターフェイスを検討する。

キーワード：信頼性、超時代性、現代性

天下の善士は、斯に天下の善士を友とす。天下の善士を友とするを以て、未だ足らずと為すや、又古の人を尚論す。其の詩を頌し、その書を読むも、其の人を知らずして可ならんや。是を以て其の世を論ず。是尚友なり。
「孟子」万章・下

1. はじめに：古典とは何か

「論語」に「温故知新」とあるが、古典とは「古くから読み継がれてきて、すぐれて現代的意味をもつ言語情報」のことをいう。古代ギリシャのソフィストたちや、帝政ローマ時代の学者たち、インドの思想家や、中国の諸子百家を嚆矢とする哲学者や科学者や宗教者が書いた古典は、人類の文明にとってもっとも重要な知的資産である。

なぜ古典が重要なのであろうか。それは生物学的にも、社会的にも、人間も人間社会も有史以来現代までまったく変わっていないからだ。

現在のほとんどの問題については、考える輩である人間が、すでに思考を巡らせていた。「人間とは何か」が根源的問いであり、そこから拮がった疑問とその解決の思考は、ギリシャ時代から記録されている。

人間とは何かを考察したことから哲学が始まり、人間の物質的・肉体的な解明から医学が派生し、それは病気の治癒に発展していった。この間に多くの知見が提案され、それは科学的根拠がないものもあったが、一つひとつ解明されている。

古代図書館で有名なペルガモン出身の貴族で、帝政ローマ時代のガレノス(126-216)は、192年のローマの大火で蔵書や自著を焼失した経験に学び、意識的に著

作が後世に残るように配慮した。おかげで、現代では動物実験ですら許されない生体実験等、ガレノスの目で確かめたことが、西洋医学の古典として現代に伝わり、ギリシャ語や英語や日本語で読むことができる。そこにはすでに著作が散逸して本としては読むことのできない古代アレキサンドリア出身のヘロフィロス(BC335-269)が死刑囚や奴隷を使って行った生体解剖の結果も活かされている。

文学はというと、これは人間の心の機微や周りとの関わりや自然の様子を表現するものであり、一種の哲学である。人間は、愛、性、信頼、喜び、悲しみ、憎しみ、恨み、嫉み、驚きなどなどを感じながら生きているが、その全体を描写するのが文学であり、長く読まれている古典はその宝庫である。

読者は、自ら多くの体験・経験をしているものの自分の言葉で表現できないこれらの感情などについて、文学者や文学作品は表現してくれるのであり、読者はその表現に触れカタルシスを覚え、喜びを感じる。きっとドーパミンが分泌されているに違いない。これこそが古典を読む魅力であり、次の作品を求める動機になっている。

これらの表現された感情は、人種・民族を越えて伝えられ共有されていて、「人類共有知ゲノム」といえる。詳しく言えば、シェイクスピアの悲劇の数々は、その後の近現代の悲劇の様式を網羅しているといわれる。しかしその原点は、ギリシャ悲劇にたどり着く。

現代社会でも話題になっている平等、公正などという概念もすでにアリストテレス(ニコマコス倫理学)で論じられており、その考えは今なお新鮮である。古典は、時空も越えて現代的価値をもつ。

古典は、言葉や国や宗教や時代が異なっていたとしても、人類は皆喜怒哀楽の感情を共有し、悲劇性も精神性も理解しあえることの証明である。人類共有知ゲノムを読み、時空を超えた人々と心を通わせることこそ人類本来の姿であろう。

インターネット検索エンジンの登場によって、キー

ワードを投入するだけで、その言葉にまつわる問題を考え、文章にして残した、古今東西の科学者、思想家、小説家、詩人の名前と著作が一覧表として提示される。「尚友」たちの著作は、著作権が切れていて、景気不景気に関わりなく、無料でダウンロードできるものが多い。

2. 世界に貢献しうる日本の古典

今から数百年前に書かれた文章が、今も有効性をもつのですか、と質問されたら、答は「イエス」である。**古典は、時代を超えて読み継がれるだけの生命力をもつ。**良い作品があるのに現代人が読まないため、正当な評価が得られていないだけだ。

日本の古典のなかで、世界で読み継がれているものは少ない。しかし、人類史的な意義をもつ貢献や著作はある。

そもそも日本でもっとも一般的に読み継がれてきたのは『論語』と『孟子』という中国の古典である。「過ちては改むるに憚ることなかれ」、「巧言令色鮮し仁」など孔子(BC552-BC479)の言葉や、「王、何ぞ必ずしも利と曰はん、ただ仁義あるのみ」、「己を枉ぐる者にしていまだ能く人を直くする者はあらず」という孟子(BC372-BC289)の言葉は、日本の学者や武士の基本思想となつて、共有知となっている。今から50年ほど前のテレビの時代劇では、江戸の町の夜の効果音として、子どもたちが寺子屋で論語を素読する音が使われていた。江戸時代の日本の庶民が、中国の古典を学んでいた証であり、学を好む人々が論語から学ぶ喜びを得ていた証である。

大陸から程よい距離を隔てた海上に点在する日本列島は、二度に及ぶ蒙古からの襲撃(元寇)をも跳ね返した安全地帯として機能した。中国本土の戦火によって古典の書物が焼失したとき、『七経孟子考文』が日本から逆輸入されたこともある。

幕末の思想家吉田松陰(1930-1959)は、長州藩の兵学者だった。海外事情を自分の目で確かめようと海外渡航を企て、下田でペリーの米艦に乗り込もうとして失敗し、萩の野山獄に下獄した。その逆境のなかで同囚者と孟子の輪読会を開き、それぞれの章句に解説を加えて『講孟笥記』が生まれた。この本は21世紀の現代も出版されていて、読み継がれている。

冒頭で松陰は、「経書を読むにあたって最も重要な問題は、聖人や賢人に追従しないということである。

もし少しでも追従する気持があると、道が明らかでなく、学問しても益がなく、かえって害がある」と言う。人の言葉を鵜呑みにするな、しっかり自分の頭で考えるということが本を読むときの心構えでなければならないという。本を読む上で当たり前のことだが、現代社会にこのような教えは見当たらない。

松陰は孔子と孟子の思想を自分流に発展させて自己完結的な行動哲学「仁智勇」を論じた。仁とは、無私のまっすぐな心。無欲で平らかな心であり、見るもの聞くこと全て前向きに受け止められ、相手や社会のために自らを役立てようと思う。仁にもとづいて志が立てられ、それが智や勇の原動力となる。智は人の善いところを摂取し、志に沿って自分を磨き高め社会に役立てる主体的学習である。最後の勇は実行の決断で、これがもっとも大切だから、平素から命をなげうつ覚悟をして決断力を養っておけ、行動がなければ仁も智も無用になるという。この行動哲学がすばらしいのは、はじめに無私があり、続いて学習があり、行動があるために、正しさが保証されていて、それがそのまま行動に結びつくことだ。

現代社会は、テレビもネットも政治家も学者も、誰の言葉を信じてよいのかわからない。どう生きればよいのか誰も教えてくれない。松陰の行動哲学「仁智勇」は現代人の役に立たないか。

日本史上、道元(1200-1253)は『正法眼蔵』(75巻)と『道元和尚廣録』(全10巻)という著作量の多さと内容が高度で複雑である点で、ダントツである。岩波書店の日本思想大系全67巻で、道元だけが上下2冊の扱いを受けているが、それでも著作の半分にしかあたらない。一人でこんなにたくさんの著作を残した例は、世界的にも珍しいのではないか。

特筆すべきは、自分の死後に偽書が生まれ、改ざんが行われることを予期した道元が、20世紀のデジタル通信技術、誤り訂正符号を考案して使用していたことである。

道元は、75巻の正法眼蔵各巻に奥書として「正法眼蔵+巻名+第〇〇」と序数表示し、弟子に初めて講じた示衆日と場所を書き入れた。奥書の日付と場所によって自分の活動範囲を結界で保護したのだ。

また、道元和尚廣録は各巻に掲載された上堂語と漢詩の数を識語として書き入れた。廣録は漢文白文だから、漢詩の数を数えられるのは道元本人しかいなかったと思われる。

死後に出された新草 12 巻本は奥書に矛盾があり、改ざんを受けた卍山本は識語をもたない。この仕組みを理解した読者は、正法眼蔵 75 巻本と祖山本廣録だけが真筆というメッセージを道元から受け取ることになる。

誤り訂正符号は、送信者が送信データを解析した結果や付随データを誤り訂正符号として付加して送信することによって、時空的に遠く離れた地点にいる受信者に、誤り訂正符号を確認することで、真正なデータを渡す技術である。この技術を道元が自分で考えて 13 世紀に使用していたことは、人類の知的遺産として共有されるべきであろう。

3. 古典を読むとは賢人と友達になること

松陰や道元の古典を読んで、想像もしなかったスマートな知恵や、ダイナミックな技術的目論見がそこに書き込まれていることに驚く。古典が読まれていないのは、古典が価値や輝きを失ったのではなく、現代人が本の読み方をまだ知らないからではないだろうか。現代人は、文化的に生きる術を知らず、メディアによって雑音レベルを高められ、多忙でせっかちな消費者に貶められている。

我々が古典を読まないのは、古文や漢文(あるいはラテン語やギリシャ語)で書かれた古典がとっつきにくい、むずかしいということがあるだろう。慣れないうち、古文や漢文はまるで外国語のように縁遠く感じられる。しかし心配はいらない。字体や文体にはすぐに慣れる。

メソポタミアの大平原を支配した王朝が、言葉を長期保存するために、文字を発明させた。そのため文字は必ず正書法とセットで発明され、正書法を教えるために学校も同時に生みだされた。

正書法とは、文字列を音節列に変換し、音節列を文字列に変換する規則、「読み書き法」である。正書法のおかげで、文字は識字者の脳に「消えない音節」として音声を伝える。すると古典を読むとは、「古今東西の科学者や歴史家や哲学者に会って、その人の話を聞く」行為である。

読書は、「その書を読むも、其の人を知らずして可ならんや。」(孟子)というように、過去の著者を友人とし、その人となりを理解したうえで、その言葉に耳を傾け、必要であれば誤りを正し、発展させるものである。この文明社会が実現した知識の伝達と継承のメカニズムを見落としていては、本当の読書はできない。

4. 低雑音環境・低速度・くり返しの重要性

古典は著者の知的レベルが高く、書いてある内容も高度に複雑で、一般読者はそれを読みこなせないと勝手に決めてかかっている。

自分よりも数百倍、あるいは数千倍、知的レベルが高い著者の言葉はどうすれば理解できるのだろう。あまり悩む必要はない。著者も同じ人間であり、同じ問題意識を抱えていると考えたらよい。読者は著者の言葉を反芻することで、著者になりきるので。

間違った読書法は、読者が自分の記憶を駆使して、自分勝手に理解することだ。あくまで著者がどのようなことを考えていて、何を見て、どう判断したかと、著者の脳内で生まれた現象として理解する必要がある。まず著者の使っている言葉を覚える。それから、著者がその言葉をどんな時にどんな意味を込めて使ったのかを読み取るのだ。

古典を理解するためには、静かな環境のなかで、ひとつひとつの言葉を時間と手間をかけて丁寧に読み解いて、ゆっくりとくり返し読むとよい。

わからないことがあれば、常にそのことを気にかけて何度も読み返す。「読書百遍」というように百回読むくらいの気概でのぞめば、少しずつ理解が深まり、あるときひらめいて著者の気持ちを共有できるようになる。

低雑音環境で、ゆっくりと低速度で読み、読み方を変えながらくり返し読むことの相乗効果によって、凡人の知的レベルは容易に数百倍、数千倍高められる。*

著者と読者の間に解説者はいないほうがよい。解説本や入門書はいらない。学校の先生や教科書もいらない。古人に出会って、一対一で教えるを乞うつもりで、ゆっくりくり返し読むと、いつか理解できる。

不登校や引きこもりの子供であっても古典で賢人に出会い、低雑音・低速度・くり返しの読書法を実践すれば、学校に行くより格段に賢くなるだろう。

注* 1 ビットあたりのエネルギー対雑音密度を分析する Eb/N0 で考えると、(i) 信号対雑音(S/N)比が 1/0.1 から、1/0.01, 1/0.001, 1/0.0001 と低雑音化すれば+10dB, 20dB, 30dB となる。(ii) 送信ビット数/秒が、1Mbps から、100KBps, 10KBps, 1000Bps, 100Bps と低速化すると、+10dB, 20dB, 30dB, 40dB となる。また(iii) 読書回数が 10 回, 100 回となると +10dB, 20dB となる。(ちゃんと全部読まない人は、-10dB, -20dB となるだろうか。)これらの3つの指標を足し合わせると、容易に百万倍から十億倍(+60~90dB)の利得が得られる計

算になる。つまりやり方次第で誰でも天才に匹敵する仕事ができるということになる。

5. 知る喜び・学ぶ喜びが人間の本能

人間は知的好奇心を本能的にもっている。知的好奇心とは、自分が知らない知識を求める人間の本能である。乳幼児が目を輝かせて世界を凝視するのは、知的好奇心の表れだ。

知る喜びと学ぶ喜びにまさる喜びはない。運のよい子どもは、知る喜びや学ぶ喜びに出会い、それを生涯求め続け、持ち続ける。不運な子どもは、間違っただけ知識を押し付けられて辟易し、無味乾燥の解説に興味を失い、あるいは安直な遊びに心を奪われて、人間にとって一番大きな喜びから疎外されて大人になる。

ますます軽佻浮薄となり、商業主義に毒されている現代に、古典と出会うことは砂漠のなかでオアシスに出会うようなものだ。古典は、人間が本来もっている知る喜びや学ぶ喜びを刺激する。

知りたいという欲望を子どもが持っていることは、言葉を発するようになってから分かる。1~2歳の命名期では「これ何」を繰り返す。2歳は質問期と呼ばれ、「どうして」を繰り返し訊ねてくる。子どもは好奇心に満ちている。

ヒトの子供期の知的好奇心は、人間になるための本能だろう。それを教えなくても自主的、主体的に自ら大きな声で訊いてくる。知らないことを知って喜ぶ、できなかったことができるようになって喜ぶ。

この知る喜びが、年齢とともに薄らいでいくのは、どうしてだろうか。文明の利器の発達によって自ら努力しなくても生きていけるようになったからだろうか。年齢とともにヒトは、知ること、発展することについて怠慢になっていき、想像・創造が貧困になって、正解を学び、あるいは詰め込まれたことを反復するだけになってしまった。

もちろん学校教育は、生涯学び続ける基盤となる学ぶ喜びを子どもたちに体験させることも目的としている。自ら目覚める人もいるだろう。そのような人たちが、学び続けてきたし、続けるのだと思う。それに応えるために、むしろ社会が求める新しい知識技能のために生涯学習が必要とされたこともあり、生涯教育が1960年代中頃にUNESCOによって提案され、世界に広まり、1988年にはわが国にも生涯学習局が筆頭局として設置された。しかし2018年に廃止され、代わって

総合教育政策局が設置された。

現在、危機を迎えて、学校教育では探究学習が主唱されている。好奇心を持ち、学ぶ喜びを知る人間としての回帰が求められているに至ったと言ってよい。

6. 脊髄反射の制約を超える：知的好奇心

デジタル言語学は、脊椎動物であり哺乳類に属するヒトは、言語処理と知能構築に脊髄反射回路を使っていると仮説する。この脊髄反射回路は、脳の一番奥にある脳室の中の、免疫細胞ネットワークである。(本大会のポスター発表「脳室内免疫細胞ネットワークによる認知モデリング」を参照のこと)

脊髄反射は、脊椎動物の脳の最奥部にある本能的要素の強い生命維持のメカニズムであり、新たな記号と意味を後天的に学習できるようになっているとはいえ、ヒトが知的好奇心を活性化して、勉強に没頭するために使うためには向いていない。

脊髄反射は、記号や意味の記憶の産生やネットワークが不随意に行われるため思い通りにならず、頑迷で柔軟性に欠け、受動的で自分から積極的に動かず、反射的でよく考えることなく反応し、自己充足的で自分が必要なことはすべて知っている勝手に思いこみ、自己中心的で、自分が知らないことは見えないし聞かないのだが、それで不便を感じない。自分と違った意見をもつ相手に出会うと、自分が間違えているとは考えず、相手が間違えていると素直に思ってしまう。生存優先であるため、ハニートラップや拷問に弱い。自分の誤りに気づいたとしても、どのようにして誤りを正そうかと考える前に、誤りを指摘した相手を憎いと思う。誤りの正し方も知らない。

脊髄反射回路が、人間の知的好奇心を抑えつけている。「食べていくためには働きなさい」、「余計なことは考えなくてよい。」という社会常識に加えて、テレビや週刊誌は、本能に訴えかける美食情報や風俗写真、身の毛がよだつスキャンダルを送りつけてきて、人間の健全な知的好奇心が目覚めないようにしむける。

幼児の純粋な知的好奇心は、成長とともに文学、哲学、科学といった分野に向かい、まだ誰も解明できていない生命進化や人間性といった複雑なテーマと取り組むのが人間のあるべき姿であろう。

年を取るにつれて、忙しさにかまけ、外部からの消費の誘惑や動物的本能に訴える雑音によってヒトの目が知的好奇心の輝きを失っていくとしたら、それは人

間から遠ざかっているということになる。

脊髄反射の制約は、認知科学では「認知ギャップ」や「認知バイアス」というカテゴリーに入るだろう。歴史的に概観すると、禅問答や現代芸術がこの制約と真正面から取り組んできた。

7. 終わりに：古典に学び、文明に貢献する

インターネット検索のおかげで、キーワードを投入すると、きわめて大量だが信頼性の保証のない言語情報がリスト化される。それと比べると、時代を超えて人々に読み継がれてきているということで、信頼性が高いとみなされる。

孟子は古典を友とせよと言ったが、古典も現代人を友としたいと思っている。本とそれを読む人の間の相互作用を通じて、人類の知能を高め発展させることが文明である。

自分が文明を受け継いで生きることを自覚し、文明の発展に貢献するとき、ヒトは人間になり、永遠の命を生きるようになる。